



日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」 p.4



シンポジウム「ロールズ『正義論』と現代 -自由・平等・友愛の社会へ-」p.8



臨床倫理セミナー inさっぼろ p.11

■巻頭エッセイ

深沢 克己 安藤 宏

■イベント報告

日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」

「The 5th International Tokyo Workshop on Applied Ethics and Philosophy」
台湾・中正大学の鄭凱元氏をお招きして

シンポジウム「ロールズ『正義論』と現代
-自由・平等・友愛の社会へ-」

他

■書評

深沢 克己（人文社会系研究科教授 西洋史）

モーツァルトが重病の父親にあてた1787年4月4日付の「死の手紙」は、わが国でも小林秀雄や吉田秀和の評論のなかで引用されて有名になったが、そのなかで死を「最上の友」または「真の幸福への鍵」と呼ぶ思想は、モーツァルトの個人的な死生観を表現するものと長らく考えられてきた。しかしフランスの音楽史家ジャック・シャイエが、それをフリーメイソンの秘儀伝授の文脈で理解し、歌劇『魔笛』の秘教的解釈のなかに位置づけた結果、その集合的で歴史的な意味を考察する余地が生まれたとあってよい。

「啓蒙の世紀」のヨーロッパ全域に広まったフリーメイソン団が、おそらくは太古の農耕儀礼に起源をもち、多くの秘儀的宗教により保持された死と再生の儀礼を、継承し発達させたことは確実である。ただし最初の統轄団体であるロンドン大会所が1717年に成立した時点では、死を暗示する象徴や儀礼はほとんど見出されず、これらの要素が導入されるのは、その後数十年にわたる複雑な発展の所産である。その出発点は親方位階とヒラム伝説の創造であり、従来の徒弟・職人の上位に親方を配置して象徴三位階を確立すると同時に、親方への昇位儀礼にヒラムの死の追体験を重ねた。ヒラム・アビフはソロモン王の神殿建設を指揮した「職人の頭」であるが、旧約聖書の記述にはない異説として、この人物が悪しき職人仲間から殺害されたという伝説が創出され、その遺体を抱き上げる動作を親方への昇位の象徴としたのである。この儀礼の創造は、友愛団に死の観念を導入すると同時に、「失われた言葉」の探究という秘教的傾向に出発点をあたえたと考えられる。

もうひとつの重要な要素は、徒弟の加入儀礼に先立つ「省察の小部屋」の導入であり、加入志願者はまず暗黒の小部屋に閉じこもり、精神純化のために瞑想を命じられる。小部屋の内部には髑髏や骸骨が描かれ、「汝もし好奇心により来たるならば、ここより立ち去れ」などの箴言が記される。志願者はそこで俗人としての死を確認する「哲学的遺書」に署名したのち、目隠しをされて集会所に入室し、暗闇から光明への劇的な体験を味わうことになる。この制度はおそらく18世紀中葉以降に導入され、「土の試練」に関するヘルメス学と錬金術思想の影響下に成立したといわれる。それに対応して、加入儀礼にはやがて水と火の試練が導

入され、空気（風）の暗示とともに、自然四元素の試練が完成される。

これらの要素は、すべて『魔笛』のなかに見出される。シャイエも指摘するように、第1幕冒頭でタミーノが、同第11場でパミーナが気絶するのは、加入儀礼に先立つ「象徴的な死」を可視化しており、第2幕第2場の「恐ろしい夜」の雷鳴は、目隠しされた加入儀礼の開始に対応し、フリーメイソンの基本徳目である沈黙の修行（同第3-5場）をへて、タミーノとパミーナが手に手をたずさえて火と水の試練（第28場）をくぐりぬけるまで、加入儀礼の内容がほぼ正確に再現される。1784年12月に徒弟の加入儀礼を受け、翌年4月には親方に昇位したモーツァルトにとり、一連の儀礼はなじみ深いものであり、そこで反復される死の威嚇も、象徴的な意味で理解されたとすれば、父親あての「死の手紙」と同じく、友愛団の共有する思想体系の文脈に位置づけることができるだろう。

しかしこの歌劇台本をあらためて読みなおすと、それだけでは説明できない部分がある。いまから数年前に発見されたフランス儀礼の手引書（1788年）を参照すると、たしかに親方昇位儀礼の集会所には「死を想え」や「人生は通過点にすぎない」などの標語が掲げられ、交叉する脛骨や髑髏など、死をあらわす図像が多用されるが、加入儀礼の過程で「死の危険」が特別に強調されるわけではない。これに対して『魔笛』ではタミーノとパパゲーノに対して執拗なまでに死の覚悟が迫られるだけでなく、パミーナもパパゲーノも絶望して自殺をくわだて、夜の女王は娘にザラストロの殺害を命じ、モノスタトスも死の威嚇によりパミーナを誘惑するように、全体として死への言及が異常なほど多いのである。

この異常な死への執着が、通説では台本作者とされる劇場支配人シカネーダーの悪趣味に由来するのか、それともシャイエが真の作者と推定する啓蒙思想家でフリーメイソン幹部のイグナツ・フォン・ボルンとモーツァルト自身の「死の想い」を表現するのか、現在のわたくしにはわからない。フォン・ボルンもモーツァルトも、『魔笛』の初演された1791年に死去したのである。



安藤 宏 (人文社会系研究科教授 国文学)

文学は、「死」そのものを扱えない。扱うのは、死にまつわる物語である。

関東大震災、第二次大戦、東京大空襲・・・etc、近代の文学を見渡してみると、これら未曾有の惨禍を直接描いているものが、意外なほどに少ないことに気がつく。

たとえば大正十二年九月一日の関東大震災。

当時の総合雑誌、婦人雑誌のルポルタージュや投稿欄には、煙に巻かれ、水を求めて川に飛び込み、次々に落命していく群衆の様相が、目を背けたくなるような筆致で綴られている。だが、小説には、なぜかこうした場面の描写はほとんど登場しないのだ。

たとえば下町に育った堀辰雄は、この火災で母親を亡くし、焼け野原を一人さまようのだけれども、体験自体を小説の題材にすることはついになかった。『風立ちぬ』(昭和13)のように、その後の彼が目ざしたのは、あくまでも「死」を看取っていく生者の側の物語だったのである。

原民樹の『夏の花』(昭和22)は原爆文学の代表作として知られるが、被爆直後の惨状を示した一節をあげてみることにしよう。

ギラギラノ破片ヤノ灰白色ノ燃エガラガ
ヒロビロトシタ パノラマノヤウニ
アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキ
メウナリズム
スベテアツタコトカ アリエタコトナノカ
パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ

無機質でシュールな、超現実派の世界、とても言ったらよいのだろうか。

「パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ」では、もはや“悲劇”すら成り立たない。『夏の花』は、このカタカナで表記された世界を出発点に、そこから主人公たちが行方不明の肉親・家族を探索し、再び人間関係のネットワークを“ひらがな”で構築していく物語である。あえていえば、『夏の花』は原爆を描いてはいない。“原爆後”を、ことばであらたに立ち上げていく生のドラマなのである。赤裸々な死そのものは、ついに最後まで文学的想像力とは無縁なものではないのだろうか。

震災に話を戻すと、実は焼け野原を晩年の芥

川龍之介と若き日の川端康成の二人が数日間探訪・散策していたという事実があるのだが、このことはあまり知られていない。結局二人とも、これを直接題材にすることはなかったのだけれども、この体験は、それぞれがその後独自の幻想世界に羽ばたいていく重要なきっかけになったのだった。『蜃気楼』(昭和2)を初めとする最晩年の芥川の超常現象へのこだわりには、「パット剥ギトツテシマツタ アトノセカイ」からどのようにことばを取り戻していくか、という課題が、密接に関わっていたように思う。

次にあげるのは川端の『空に動く灯』(大正13)という初期短編の一節である。

何物にも勝つて人間を驚天さし、目を覚ませるのは、人間が絶対的だと考へてゐる事柄を、単に相対的なものだとすることだよ。それを今度の地震は一時にやつてのけたぢやないか。(略) 輪廻転生の説を焼野に咲く一輪の花のやうに可愛がらねばなるまいよ。人間がペンギン鳥や、月見草に生れ変ると云ふのでなくて、月見草と人間が一つのものだと云ふことになれば、一層好都合だがね。それだけでも、人間の心の世界、云ひ換へると愛は、どんなに広くなり伸びやかになるかしれやしない。

川端文学固有の「輪廻転生」のテーマが立ち上がっていく瞬間である。

物質的な現実としての「死」を、人間の想像力によって組み替え、あらたな息吹をもって塗り替えていくということ。その意味でも文学は「死」を、ことばによって人間の手に奪還していく試みなのだとも言えよう。否、より正確に言えば、そのプロセスをことばにしていく営為、とでもいうべきなのかもしれない。それがプロセスとして示されるかぎり、「死」は単なる「死」ではなく、自己のうちなる物語として生き続けることになるだろう。そしてそこにはおそらく、文学は「死」そのものから疎外され続けるかぎりにおいて「文学」たり得るといふ、永遠のパラドックスが秘められているのである。



池澤 優 (人文社会系研究科教授 宗教学)

2010年11月20日に韓国のソウルで日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」が開催された。「東アジアの死生学へ」は2008年に北京で中国社会科学院との共催で、2009年に台北で国立政治大学と共催で行い、成均館大学校との共催で開いた今回の会議は3回目になる。今までと同様、GCOE側では竹内整一氏（鎌倉女子大学教授）が企画者、韓国側では金汰徑氏（成均館大学校主席研究員）がとりまとめを行い、お二人は本会議の司会もつとめられた。通訳は朴倍咲氏（東京大学文学部GCOE特任研究員）と丁ユリ氏（東京大学大学院生）、金静希氏（誠信女子大学校非常勤講師）である。会場はソウルの中心部、コリアナホテル2階の会議室であった。

会議は李熙穆氏（成均館大学校人文科学研究所所長）と池澤の挨拶の後、第一セッションとして池澤「儒教的生命倫理」における“伝統”——Juria Tao ed., *China: Bioethics, Trust, and the Challenge of the Market (2008)*を題材として、崔一凡（成均館大学校教授）「韓国人の儒教的死生観に関する研究——栗谷 李珥を中心に」、昼食をはさんで第二セッションとして山崎浩司（東京大学文学部上廣死生学講座特任講師）「原爆マンガにおける責めの考察——『夕風の街 桜の国』を題材に」と鄭孝雲（東義大学校教授）「知的融合言説としての「死生学」研究」、第三セッションとして伊藤由希子（東京大学文学部GCOE特任研究員）「死生を位置づけるということ」、韓榮奎（弘益大学校講師）「韓国漢詩における傷逝の伝統と植民地期の挽詩」の発表とそれぞれについての個別の議論が行われ、その後、総合討論が行われた。日本側で参加したのは、金森修氏（東京大学大学院教育学研究科教授）、福間聡、エリック・シッケタンツの両氏（東京大学文学部GCOE特任研究員）である。

今回の会議ではパネリストと限られた参加者のみが集中的な討議を行う形式を採ったが、議論はかなり白熱した。が、これまでの北京、台北とはかなり違う雰囲気であったことも確かである。まず指摘しなければならないのは、死もしくは死生を学問として設定することへの違和感が表明されたことである。韓榮奎氏は本題に入る前に、韓国では「〇〇学」という時の「〇〇」には肯定的価値のある概念が入るのであり、

死を学問とすることは考えられないと述べられた。また、参加した成均館大学校の大学院生は休憩時間に池澤に「なぜ死を学問として扱うのですか」と聞いてきた。これは「生死学」が一つの学問領域として認められている中国・台湾では考えられなかった現象である。第二に、にもかかわらず、韓国側のGCOEに対する関心は高かった。鄭孝雲氏の発表はアメリカと日本の関係分野に関するサーヴェイであったが、我々GCOEの活動は詳細に把握されており、正直、海外にこれだけのウォッチャーがいるのは驚きであった。第三に、韓国における死への関心の高まりは、若年層の自殺の急増と、その原因と思われる就職難の問題に原因があるということである。発表の中で触れられたところでは、近年の韓国では大学卒業者の殆どは正社員にはなれないということである。大学三年次で「就活」に専念しなければならない日本も人ごとではないが、自殺の問題は「生きにくさ」の問題に直結していると実感させられた。その他にもES細胞など、興味深い問題が議論され、実り多い議論になったと思う。

なお、会議の翌日は「宗廟」を見学した。その帰途に飲んだお茶は実に美味であった。





一ノ瀬 正樹 (本GCOE拠点リーダー／人文社会系研究科教授 哲学)

去る2011年1月19日、東京大学人文社会系研究科哲学研究室にて、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の主催にて、「The 5th International Tokyo Workshop on Applied Ethics and Philosophy」(TWAP)を開催した。今回のTWAPでは、台湾の中正大学副教授のKai-Yuan Cheng (鄭凱元)氏をお招きして、講演をしていただいた。会場の哲学研究室には20名程の聴取が参集し、東アジア間の哲学研究者相互の交流の活発化という近年の著しい傾向を象徴するかのように、熱気に満ちた会となった。

Cheng氏は「The Nature of Self and Death in the *Zhuangzi*」、すなわち『莊子』における自我と死の本性」と題して、講演を行った。Cheng氏は西洋哲学、とりわけWittgenstein研究を核として、現代分析哲学の研究を遂行してきた方だが、今回は「莊子」というアジアの思想を取り上げた。実は、分析哲学的な視点からアジアや東洋の思想を取り上げ検討することは、今日、東アジアの哲学研究の一つの流れなのである。Cheng氏の今回の発表もそうした流れの中に位置づけることができる。Cheng氏は、『莊子』を現代の自我や死の問題に照らして読み解くこと、そのことで現代哲学の文脈における『莊子』の思想の意義を示すこと、この二つを遂行しようとした。『莊子』では、生死というのは自然な秩序の一部であり恐るるに足りないと言われるが、Cheng氏は、「死」には生物的なものと主観的なものがあり、莊子の思想は主観的で心的なレベルでの死に対する恐怖というものを必ずしも軽減しないと論じ及ぶ。では、そもそも主観的な心のあり方、そしてそれを統括する自我とはどういうものか。Cheng氏は、莊子の思想の中に、自我を知覚の束として捉えるHumeの考え方が見いだされるとする。その上で、そのような文脈には、自我を一種の「アリーナ」と捉える現代哲学の立場に対応する見方があると指摘し、そうした自我がさまざまな比喻を通じて理解される可能性を描き出す。しかし、このような方向で理解される自我について、莊子の思想を真に読み解くには、いわゆる「胡蝶の夢」(The Dream of the Butterfly)の議論を取り上げなければならない、とCheng氏は論じ進める。すなわち、ある日莊周という者が胡蝶になった夢を見て、その夢の中では、自分が莊周であることも知らず楽しく飛んでいたが、突然夢から覚め、自

分が莊周であることに気づく。では果たして、莊周が胡蝶になった夢を見ていたのか、それとも胡蝶が莊周になっている夢を見ているのか、どちらなのか。それは分からない。これが「胡蝶の夢」の議論である。Cheng氏は、そこから、私の「アリーナ」の中心にいるのがほかならぬ「私」であるのは偶然的なことなのだ、という論点を導く。それゆえ、私の「アリーナ」の中心に実在的なものは何もない、よって、自我というのは単に幻想にすぎない、と喝破する。こうしてCheng氏は、主観的な死というものは一種の幻想なのであり、恐怖を覚えるべき何もかも主観的死にはない、なぜなら、主観的な自我なるものは存在していなかったからだ、そのようにショッキングな結論を引き出したのであった。

いささか衝撃的な議論であり、その含意をどのように測ってよいのか戸惑いも覚えたが、『莊子』という中国の古典の中に、現代哲学にも通じるような、そして現代でも十分に衝撃的であるような、奇想天外な論点が宿されていたということを目の当たりにして、私たちが知的な興奮を覚えたことは確かであった。討議の時間になるといろいろな質問が出たが、Cheng氏は、丁寧に一つ一つの質問に答えてくれた。筆者自身も質問をした。すなわち、自我が存在しないという思想は、私たちが「責任」の概念を用いながら営んでいる社会生活とどのように整合しうるのかという質問であった。「責任」はそれが帰属される自我の存在をいわば論理的に要請すると思われるからである。Cheng氏が言及したHumeでは、思考についての自我と情念についての自我とが区別されているということ念頭に置いた質問であった。この点についてCheng氏は、実は莊子の思想は、倫理的な観点への言及がないということが特徴でもあり、批判されるところでもあるとして、今後検討してみたいと応じてくれた。終了後、一同で懇親の場を持ち、議論はさらに盛り上がりつつあった。東アジアの研究者間での哲学の交流が、今後さらに活発となっていく密かな予兆を感じた一日であった。

山崎 浩司 (人文社会系研究科特任講師 死生学／医療社会学)

去る2010年12月4日(土)、東京大学文学部法文2号館2番大教室において、午後1時半より4時半まで、シンポジウム「傷つきを語ることの意味と聴くという経験——質的心理学における「語り」研究の地平」が開催された。主催は日本質的心理学研究会研究交流委員会で、グローバルCOE死生学が協賛した。このシンポジウムの目的は、トラウマを語ることと聴くということ、精神科医などの実践家の立場と、この現象に関心のある研究者の立場の双方から考えてゆくことであった。このテーマが死生学の問題としても捉えられうるのは、トラウマ体験そのものが往々にして死を目の当たりにしたり、あるいは少なくとも死を意識せざるをえなかったりする体験であり、そうした体験者の語りとはまさに死生の語りといえるからである。

こうしたトラウマの語りにもつわる問題を考える上で、我々がぜひ話を伺いたいと考えたのが、精神科医でトラウマに関する臨床だけでなく医療人類学的な研究も精力的にされている宮地尚子氏(一橋大学)と、やはり精神科医であり特に犯罪被害者などのケアについて豊かな経験と造詣をお持ちの小西聖子氏(武蔵野大学)であった。両氏はこのテーマに関して第一線の実践家／研究者であり、そのことを知っている人々が数多く参加を希望したため、定員の関係上お断りせねばならなかった人が少なからず出た。当日は、会場の最大収容人数ほぼいっぱいに参加者が集まった。

両氏による講演と対談に先だて、企画者の野坂祐子氏(大阪教育大学)と徳田治子氏(高千穂大学)より、本シンポジウムの趣旨説明および議論のポイントの提示があった。ポイントは3つに整理されていた。まず、トラウマを語るということという現象そのものには、いったいどんな特徴があるのか。次に、トラウマの語りを語る側と聴く側のあり方、すなわちポジショナリティ(位置性)をどう考えるべきなのか。そして最後に、トラウマの語りを臨床家あるいは研究者として聴き続けること、それにとどまり続けることの意味は何であるのか。以上3点である。

こうした問題提起を受けて、宮地氏と小西氏がそれぞれ講演され、その後対談へと移行した。宮地氏は、トラウマの語りがどのように立ち現

れ扱われるのかといった語る者／聴く者のポジショナリティの様相を、「環状島」という比喻モデルによって見事に説明された。詳細は宮地氏の著書『環状島＝トラウマの地政学』(みすず書房)に譲るが、このモデルの最大の有効性は、トラウマを引き起こした出来事に対して距離が近い者ほど語る力を有する、という一般的な理解(円錐島モデル)を打破している点にある。環状島が中空構造であるように、実際にはトラウマ的出来事の最も中心にいる者は、死んでしまっていて語れない存在になっていたりする。また、たとえ生きていたとしても、環状島の内側に溜まった水(「内海」)の下に沈んでいて、語れずにいることも多々ある。トラウマを語れる者は、この内海から出て環状島の「内斜面」に這い上がった者ということである。

小西氏によれば、最近の臨床現場では、支援を求めて来たにも関わらず、自分の傷つきを語れないクライアントが増えているという。つまり、「内海」に沈んでいて「内斜面」にまだ這い上がっていない人々である。こうしたトラウマを抱えた人々は、自分の生の見通しがもてない。というのも、トラウマとは過去も未来も持てない状態であるからだ。そうした見通しをもてない、語れない人々とともにあり、時間をかけて語りを待ち、何とか見通しを見出しているところと「聴き手」としての喜びがあると小西氏は述べていた。また、トラウマとはその体験者の中から摘出手術のように取り去れるものではなく、血管バイパス術のように心のうちの流れをよくすることで軽減・解消していくものだと説明があったが、これはまさにトラウマを臨床家や研究者としてどう捉えるべきかという論点につながっていた。

登壇者と参加者との活発な意見交換や議論の時間が取れず、質問用紙を介したインタラクションに留めざるを得なかったが、質問用紙の記述から、参加者も大いに学びがあり、日々の実践や研究への刺激を受けた様子が伺えた。登壇者、企画者、運営者の皆さんに、この場を借りてあらためて御礼申し上げたい。



松浦 和也（教務補佐員・人文社会系研究科博士課程 哲学）

2011年1月8日9日の両日、「第5回BESETO 哲学会議」が行われた。この会議は北京大学、国立ソウル大学、東京大学が共同し、哲学・思想系を中心とする教員と院生が中心となって、毎年1月に開催される学術会議である。一昨年の第3回は東京大学駒場キャンパス、昨年の第4回はソウル大学で行われ、この第5回は北京大学での開催であった。今回も本死生学COEと駒場UTCPが派遣事業を行った。本死生学COEからは鈴木泉准教授、特任研究員のErik Schicketanz氏、倫理学研究室の院生である矢島壮平氏、哲学研究室の院生である景山洋平氏、富山豊氏、および報告者の計6名が、駒場UTCPからは信原幸弘教授、石原孝二准教授と共に計9名が参加した。

今回のBESETOは‘Rationality in Human Life’ というテーマを掲げた。約40あった研究発表はこのテーマに対しそれぞれの観点からアプローチを試みていた。これらの研究発表は、2会場、午前・午後、2日間の合計8つのセッションに配置された。それぞれのセッションは現象学、科学哲学、分析哲学、政治哲学、近世哲学、東洋思想などの大まかな領域を定めていたが、実際にはどの領域でもその内部には膨大な言語空間が広がっており、どのセッションでもバラエティ豊かな研究発表が行われた。

報告者にとって今回のBESETOがはじめての参加であったが、これらのセッションは専門性よりも学際性を醸し出していたことが強く印象に残っている。BESETOはたしかに「哲学」の学術会議であるが、議論対象および方法は限定されず、むしろ広範な研究対象と多種多様なアプローチを許容し、その上で討議を組み立てようとする傾向が見られたからである。

報告者は‘Natural Science and Eleatic Arguments in Aristotle’s *Physics I*’と題する発表を行った。アリストテレスは『自然学』第1巻でエレア派の2つの有名な言説、「ある」の単一性と生成否定論を批判するが、この批判の目的はアリストテレスの教説、特に「ある」の多義性が自然科学を学(ἐπιστήμη)ならしめる適切な基盤であることを示すことだった、というのが報告者の発表の概要である。報告者は自身の古典文献学寄りの議論が参加者に受け入れら

れるか危惧していたが、ニース大学のPaul-Antoine Miquel先生から「自然科学と形而上学の違いは何か」とラディカルで巨視的な質問を頂くことができた。このような自身のフィールド外の専門家から質問を頂けることは報告者にとって貴重な体験であり、発表から1ヶ月以上たった今も、しばしばその問いを心の中で反芻している。

ここで報告者は若手研究者の立場からBESETOが持つ学術上の意義を述べておきたい。われわれ若手にとってBESETO最大の魅力は国際学会の体験や国際的交流の機会にある。だが、実際に参加してみて、BESETOがわれわれに与えてくれるのはそれだけではないと感じた。発表に対し質問を受ければ、われわれは自分の研究フィールドの位置を意識せざるをえない。また、発表の聴講や発表者への質問は、その発表者の位置と同時に自分自身の位置を露にさせる。このような自分のフィールドの位置を否応なしに意識しつつも専門を越えた学術的交流が求められる環境におかれたとき、自分のフィールドの内部言説を相互理解可能なレベルまで如何にパラフレーズするか、という課題が生じる。そして、専門的知識を備えた自分の研究フィールドの咀嚼と、その咀嚼のクリアーな表現という課題をBESETOはわれわれ若手研究者一人ひとりに突きつけてくるのである。この課題は、自分の研究フィールドに集中すると忘れがちである。だが、人文学研究に要求される基本的態度のひとつであろう。

今回の第5回BESETO国際会議が成功裏に終了したのは、劉哲先生をはじめとする北京大学スタッフの尽力の賜物である。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。次回の第6回BESETOは2012年1月はじめに東京大学本郷キャンパスで実施される予定である。東アジア地域における人文学研究のさらなる発展のために、今度はわれわれが尽力する番である。



報告 シンポジウム「ロールズ『正義論』と現代 —自由・平等・友愛の社会へ—」

福間 聡 (本GCOE特任研究員 社会哲学)

2011年2月4日、東京大学医学部鉄門記念講堂において、東京大学生協書籍部およびグローバルCOE「死生学の展開と組織化」の共同主催にて、シンポジウム「ロールズ『正義論』と現代 自由・平等・友愛の社会へ」が開催された(協賛として紀伊國屋書店、勁草書房、東京大学出版会も参加)。これは昨年4月からNHKで放映され、正義論ブームを引き起こしたマイケル・サンデル氏の『ハーバード白熱教室』の中で何度も言及され、また彼の論敵でもあるジョン・ロールズの『正義論 改訂版』が昨年11月に紀伊國屋書店から翻訳出版されたことを記念したシンポジウムである。

シンポジウムは二部から成り、第一部は共訳者である川本隆史氏(教育学研究科)の基調講演『『正義論』の宇宙、再訪 一後ろから読んでみよう』から始まった。研究者は本を後ろから読むことが多い、つまり索引や注、あとがきが充実しているかどうかでその書籍の購入を判断するという持論に基づいて、川本氏は『正義論 改訂版』を後ろから読み解くことから『『正義論』の宇宙へ』と私たちを誘った。まず裏表紙にかけられた帯紙に記された『ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー』1972年12月3日号の短評(「生まれつき恵まれた立場におかれた人びとは誰であれ、運悪く力負けした人びとの状況を改善するという条件に基づいてのみ、自分たちの幸運から利得を得ることが許される。この言明を擁護しようとするロールズの論法は、説得力がある。この命題の政治的な含意は私たちの暮らしを変革するかもしれない)を紹介し、索引における人名頻出度ベスト4(カント、ミル、アリストテレス、シジウィック)や邦訳で新たに追加した索引(世話する/心を砕く)を挙げ、訳者あとがきで言及したロールズの戦争体験の解説をした。

第二部は「六粹人『正義論』問答」と銘打ったパネルディスカッションが開かれた。まず森政稔氏(総合文化研究科)が口火を切り、ロールズの名前をはじめに聞いたのは西部邁さんであったことやロールズが打ち出す「正義の二原理」のぎこちなさ、「リベラル」意味の混乱(実際の政治の場面と政治哲学での意味の相違)、『正義論』のアンビバレントな魅力について話された。次に大沢真理氏(社会科学研究所)は、所得や雇用の安定

性、職場の安全衛生、労働組合といった7つの指数をベースに測定された「経済の安全保障指数」にあっては、日本の指数は90か国中18位であること(上位は北欧諸国、次に大陸西欧諸国、イギリスは15位、アメリカは25位)を指摘し、ロールズの政治哲学の応用例として、基本的な経済の安全保障は人権であるべきことを提示した。また『正義論』の中にはケアの概念はあっても、ケアされる側については言及がないことを批判した。盛山和夫氏(人文社会系研究科)は『正義論』との出会いとして、階級・階層の規範的な問題とホップズの秩序問題に対する関心からロールズの正義論へと至ったことを述べ、社会学や経済学では「公理的」に語られることの多いロールズの正義論であるが、そうした解釈に対する違和感から『リベラリズムとは何か 一ロールズと正義の論理』(勁草書房)を書いたこと、そして世代間の正義を考える上でロールズの貯蓄原理が有している意義について指摘した。最後に井上達夫氏(法学政治学研究科)は「『正義論学級』の成績通知表」として初期ロールズ(『正義論』)と後期サンデル(『公共哲学』等)にはB評価、後期ロールズ(『政治的リベラリズム』)と初期サンデル(『リベラリズムと正義の限界』)にはF評価を下し、リベラリズムのパラダイムを自由から正義へとシフトさせた初期ロールズは偉大であるが、後期ロールズの「重なり合う合意」では政治的正統性の問題は解決できないと提起した。川本氏も参加した全体討議では、最適な税制度や社会保障制度は何か、また格差原理の解釈や財産所有の民主主義の可能性について議論が行われ、フロアとの質疑応答を行った。

共訳者の一人として私も第二部の司会を務めたが、サンデル効果もあってか、200人を越える参加者があり、岩波書店を含んだ協賛各社による会場入口でのブックフェアも盛況であった。今回のシンポは東大生協駒場書籍部店長の辻谷寛太郎氏の尽力によって開催へと至ったが、本の作り手(著者・訳者・編集者)と読み手、そして媒介者(書店)とが一堂に会して意見を交換できたことは、急激な電子化の波に直面している出版文化にあって、一つの方向性を示しえたのではないかと思われる。



《医療・介護従事者のための死生学》

山崎 浩司（人文社会系研究科特任講師 死生学／医療社会学）

去る2011年2月5日、東京大学法文2号館1番大教室において、グローバルCOE冬季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》が開催された。本セミナーは7回目を数え、今回は午前中が演習、午後が一般公開のシンポジウムという構成で、参加者は最終的に200名以上となった。

演習では、がん医療に関する事例検討を行った。主な論点は——積極的な化学療法から緩和ケアの重点化への移行を、本人や家族にどう伝えるべきか。本人は在宅療養を希望しているが、医師はそれが困難であると判断する時、そこに落としどころはないのか。在宅緩和ケアを受ける患者やその家族が、ホームヘルパーをケアのプロではないとみなして敬遠する現状がある中で、どのように彼らに関わってもらえるのか——等であった。

午後の合同シンポジウム「地域におけるがん医療と死生学」は、厚生労働科学研究費補助金（がん臨床研究事業）地域におけるがん対策の推進と患者支援に資する介入モデルの作成に関する研究班とグローバルCOEが共同主催し、財団法人日本対がん協会が共催した。

初めに、国立がん研究センターの渡邊清高氏が、シンポジウムの狙いを、①現場の医療者と、日本人の死生観や地域の看取り文化を研究する人文社会科学系研究者とが、同じ舞台上で議論する場を設けること、②地域の社会的・文化的背景を踏まえた適切な情報提供のあり方について討議すること——と端的に説明された。

引き続いて、日本人の病気観や死生観について造詣の深い文化人類学者の波平恵美子氏（お茶の水女子大学名誉教授）が、「地域社会における「病むこと」の現在」と題して講演を行った。がん等の病に対する人々の認識は近年急速に多様化してきており、それには情報格差、制度的不備、医療アクセスの格差、周囲のサポートの多寡等、地域格差が関連していること。がんが以前の結核のようにスティグマ化され、その後「家筋（家系）」とは関係なく誰もがかかる病と認知されるように変化してきたこと。しかし、がんになることで雇用上の不利益を被る恐れから、地域ごとのがん登録が進まないこと等が指摘された。

休憩を挟み、今度は3人のシンポジストが報告

を行った。まず、宮城県で在宅看取りを積極的に展開してきた医療法人社団爽秋会の岡部健氏が、「在宅緩和ケアと看取りの文化」と題して発表した。地域で人々の死と向き合っていく過程で、死を「正常な生理現象」として捉えることの重要性を認識したが、そうした視点の獲得には人文系の研究者との協働が大きかったこと。さらに、その協働により、末期患者に見られる「お迎え」現象を単なる「せん妄」とみなさず、そこに人々の死生観／スピリチュアリティの存在を見出し、ケアに反映させていく必要性を認めたことを話された。

次に、石川県で死生観と在宅医療に関する意識調査を実施し、その結果をもとに宗教哲学的な観点から知見を生み出してきた石川県立看護大学の浅見洋氏が、「ルーラルにおける住民の終末期療養ニーズと死生観の変容」と題する報告を行った。多くの示唆があったが、印象深かったのが、若年層ほど末期の在宅療養希望の割合が低いという変化が、ここ数年で起こったとの調査結果であった。これは「迷惑」をどう捉えるかという問題に関わっており、がん医療を超えて考えていくべきポイントである。

最後に山崎が、「青森県でがん患者として生きる——がん体験談データベース構築の試みを中心に」と題して発表した。全国でがん死亡率が最も高い青森県で、がん医療・緩和ケアに対する県民の期待のなさを名実ともに払拭することの重要性と、そのためにがん患者による体験談をデータベース化し、患者目線でがん医療を捉えられるようにする環境整備の必要性を指摘した。

3人の報告に対し、静岡大学の竹之内裕文氏と本学の島蘭進氏がコメントをし、「地域」といった時の具体的な単位は何を指すのか、死生観教育の重要性を示唆する際の「教育」とはどのようなものであるべきなのか、他者に「迷惑」をかけたくないという人々の意識のあり方を問い直すべきではないか、といった鋭い指摘を行い、議論を発展させていった。

「地域におけるがん医療と死生学」というテーマは、今回のみで論じつくせるものではなく、今後もくり返し議論を重ねていく必要性が、主催者や参加者によって確認された。

竹内 聖一（本GCOE特任研究員 哲学）

平成22年9月23日(木)に、本G-COEと、金沢の北陸がんプロフェッショナル養成プログラムとの共催で、「臨床倫理セミナー in かなざわ」が開催された。このセミナーは、G-COE事業推進担当者の清水哲郎が中心となって実施している医療・介護従事者対象のリカレント教育の一環として行われているもので、金沢での開催は今回がはじめてである。会場となったホテル金沢には、金沢周辺の病院から60名あまりの医療従事者が集った。また、G-COEからは研究員の竹内が参加した。

セミナーでは、まず清水が小冊子「臨床倫理の考え方の検討と実際」をもとに講演を行った。ここでは他のセミナー同様、まずケアに臨む医療者に求められる姿勢について解説が行われた。次いで、意思決定のプロセスにおいて、情報を共有した上で医療者と患者とが合同で意思決定を進めることの重要性が確認された。さらに、提供を受けた実際の事例をもとに、臨床倫理検討シートの使い方についても解説が行われた。

講演の後、参加者は8名程度の小グループに分かれて、2つの事例を検討した。

第一の事例は、がん治療のために気管切開をした後、咽頭痛に苦しむようになった患者の疼痛をどのようにしてコントロールするかをめぐるのであった。患者本人は自分の判断で鎮痛剤を服用することを希望していた。医療者側は患者の自己判断に基づく服用は、患者の自己コントロール感を高められるという点で一定のメリットがあることを認識していた。しかし、専門的知識に基づかないという点でやはり望ましくない側面もあるため、対応に苦慮していた。検討では、疼痛に対する客観的な尺度を用いて、

患者に自分の疼痛の程度を認識してもらうことなどが提案された。

第二の事例は、がん患者に対する治療方針の選択をめぐるものであった。患者は手術後の病理検査で化学療法が必要と判断され、いったんは化学療法の施行に同意していた。しかし、化学療法が始まると、点滴によってもたらされる血管痛に苦しむようになった。そして、最終的にはその痛みを耐えかねて化学療法の中止を希望することになった。他方医療者は、患者の病状を考慮して化学療法の続行が望ましいと判断していた。検討では主に、なぜ患者が化学療法中止を希望するに至ったのか、また、化学療法を続けるためには患者の抱える疼痛や不安にどのように対応していくべきかということが討論された。その結果、治療方針を選択する際に、医療者と患者との間で、情報を共有することの必要性が確認された。また、患者に対する心理的なサポートの重要性も浮かび上がってきた。

最後に北海道医療大学大学院教授の石垣靖子氏が講演を行った。講演では、午後の事例検討において焦点となった「自己コントロール感」と「疼痛」が主題となった。石垣氏は、病が、人から自己コントロール感を奪うことを指摘した上で、医療者の果たすべき役割は、患者のセルフケア能力を高めることで自己コントロール感を回復させる手助けをすることであると論じた。また、疼痛については、麻酔などの医学的処置だけでなく、患者が自分の好きなことをして気持ちを高揚させることも、痛みを耐えるのを助ける有効な手段でありうることを指摘し、患者の抱える痛みに対して多様なアプローチを試みることが重要であると論じた。





会田 薫子 (本GCOE特任研究員 医療倫理学)

東京大学グローバルG-COE「死生学の展開と組織化」が関わる2つの臨床倫理セミナーが2011年1月15~16日の2日間、札幌市で開催された。これらのセミナーは、G-COE死生学事業推進担当者の清水哲郎が中心となって実施している医療・介護従事者対象のリカレント教育の一環として実施され、G-COE死生学から竹内聖一特任研究員と会田が参加した。

1月15日(土)のセミナーは、北海道医療大学の関係者が組織する精神障害者・高齢者臨床倫理検討会と厚生労働省老人保健健康増進等事業(申請主体:日本老年医学会)による『臨床倫理支援ツール』作成ワーキング・グループの共同主催、G-COE死生学の共催で、札幌市のアスティ45を会場として開かれた。おもに札幌市内から看護師や医師ら約50名の医療者が参加した。

午前中は、まず、清水が「本人・家族の意思決定を支える臨床倫理」と題した講義を行い、開発中の『臨床倫理の考え方 - 本人と家族の意思決定プロセス・ノート汎用版』について説明し、次いで会田が「高齢者ケア - 食べられなくなったらどうしますか」と題した講義を行い、上記の『意思決定プロセス・ノート - 人工的な水分・栄養補給法版』について説明した。

午後は、参加者の1名が、認知症を有し脳梗塞発症後に摂食困難となった事例について経過報告し、今後の人工的な水分・栄養補給法の方針決定についてグループ・ディスカッションを行い、患者本人の意思が不明確な場合に、難しい意思決定を迫られる患者家族をいかに支援すべきかについて議論した。

また、精神障害に関しては、統合失調症患者が自身では納得しないながらも入院をしぶしぶ了承した事例に関する倫理的検討を行った。竹内研究員がグループ・ディスカッションのファシリテータを務めた。

北海道医療大学の石垣靖子教授は講評で、強制的あるいは半強制的に患者を入院させた場合、入院後に患者と医療者の信頼関係の構築が困難になりがちであることや、患者に対する白衣の心理的圧力を医療者は認識する必要があることを指摘した。また、精神科医療施設の閉鎖病棟には倫理的な問題が多いと述べた。

1月16日(日)は、G-COE死生学と東札幌病院

臨床倫理委員会の共催で、「臨床倫理セミナー8 in さっぽろ」が東札幌病院で開催され、同病院と関連施設の看護師を中心に約45名の医療者が参加した。東京の医療施設からも看護師2名が参加した。

午前は清水が、「臨床倫理検討の進め方——医療側が推奨する治療を患者側が拒む場合を例として」と題して講義した。

午後は、参加者は7つのグループに分かれ、臨床上的意思決定や家族らへの対応に難渋した2症例について、臨床倫理検討シートを使用しながら課題を整理し、グループワークと全体討議を通して、課題解決に向けた具体的な対処や介入方法を探った。グループワークでは各班で1名がファシリテータとなって、「人として尊重することをめぐって」、「本人の益を目指すことをめぐって」、「社会的視点からのチェック」という3つの倫理原則に沿った分析を行いながら、患者と家族が抱える問題とその性質を探索し、医療者として取り組むべき課題の整理と統合に努めた。

検討した症例のうち1つは精神疾患を有する末期癌患者の事例であった。患者本人は苦痛症状もあまり明確に訴えず、家族もいないため、担当の医療者は治療方針や療養場所の決定に困難を極めたと報告された。

もう1例も末期癌患者であったが、この事例では、大切な家族の看取りに直面して動揺し、患者の生存時間を少しでも長くしようとして、患者にとって益がない心肺蘇生を要望する患者家族の心をどのように支えるかについて話し合った。

この事例について、癌研有明病院の高屋敷麻理子氏(緩和ケア認定看護師)は、緩和ケアを推進するためには、病院としてDNAR(Do Not Attempt to Resuscitate Order)の方針を立て、臨終前の子心肺蘇生への意向について、医療者は患者本人および家族とよく話し合い、事前に真意を把握しておくことが大切であると述べた。

清水は講評で、動揺した家族が切望するからといって、患者にとって益がない心肺蘇生を実施することには慎重であるべきだと指摘し、家族の動揺に寄り添い、気持ちを理解するケアを提供することは肝要だが、患者に明らかに害になる選択は倫理的に妥当とはいえないと述べた。



石川 公彌子 (本GCOE特任研究員 日本政治思想史)

幸運にも、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」プロジェクトに研究員として参加を許されてから、早いもので丸三年となる。この間、親しい人びとを亡くし、第三子を出産し、多くの方々に支えられながら必死で生と死に向き合ってきた。人間の死生は切り離せるものではなく、誰もが死者と生者とのつながりのなかに生きているという確信を抱いている。

筆者が専門とする国学思想においては、ひとは死後どこに赴くのかということが一大テーマとなっている。本居宣長は、いかなる人間も死後は「よみの国」へ赴くと主張した。平田篤胤は、死後、亡骸は土に帰り、靈魂は幽冥に赴いて縁ある人びとを守り幸いをもたらすとした。しかもオホクニヌシによる「死後の審判」が行われ、生前の悪行には罰、善行には「賞」が与えられるという。すなわち、ここに一種の救済論が成立している。生者は死者に見守られており、死者のまなざしが生者に日常倫理や規範をもたらすのである。

このような国学思想を近代において展開した思想家のひとり、民俗学者、国文学者であり歌人・釈道空としても著名な折口信夫である。折口は国学を「道念」すなわち「もたらせんす」を追及する学問であると規定し、いわゆる国家神道や総力戦体制下の国家を批判しつつけた。戦後は、イエの論理にもとづいた祖先信仰を否定して若者を中心とする戦死者の未完成霊の救済を掲げる一方で、「裁く神」「罰する神」としてのオホクニヌシを中心とする一神教的な神道普遍宗教化を主張した。はたして、折口は「強い」人間だったのだろうか。

折口は、心に傷を負った「弱い」人間であった。双子の弟は父と母の上の妹とのあいだの子であり、自身も母の実子ではないのではないかと疑念を抱き煩悶し、成績不振や落第も相俟って自殺未遂をくり返した。そしてはかない生命を自覚したうえで、それでも生きようとする意志に美を見出した。後年、北原白秋との対談「緑が丘夜話」(一九二八年)において「芥川龍之介さんが、あんなに死にたいならば、あんなに死に榮えのする道を選ばなかつたらよかつたと思ひます。世の中には死にたくつても、それを以て死んだ、と思はれることの堪へがたさに生きてゐるものが、沢山あるのです」と発言している。

宣長は、人間本性として「めゝし」(女々し)さ、すなわち<弱さ>を見出した。折口が宣長の人間観を継承していることは、その源氏物語論に顕著である。折口は、<弱さ>をもつ光源氏が過ちを犯しつ

つも反省し、向上して神に近づこうとする営みを肯定して贖罪を見出し、迷う姿を評価する。『源氏物語』こそが「日本人の最も深い反省」を描いた書であり、そこから人間が苦しみに耐え人間として向上してゆく過程を学ばなければならないと断言するのである(「反省の文学源氏物語」)。

折口はイエの論理を峻拒していたが、単身生活を志向していたわけではない。折口が体系化した「まれびと」論においては、政治権力とは無縁の弱者が漂泊民として共同し、強靱な意志をもって困難を乗り越えていく。これらの「まれびと」の共同性は、「親密圏(intimate sphere)」と称するべきだろう。折口は独身ではあったが、単身者として生きたのではない。そばには、つねに弟子たちの姿があった。臨終を看取ったのも、弟子たちであった。折口は弟子たちを「我が子ら」と呼び、彼らは強くむすびついていた。

縁あって、いくつかの大学で思想史を講じている。講義の最後に折口を取り上げ、誰もが死者を含む多くの人びとに支えられていること、失敗してもそれで終わりなのではなく反省すればよいということ、けっして絶望しないこと、苦しくても他者とのつながりを断ち切らないことをメッセージとして述べるようにしている。学生たちの答案には、折口の思想に救われた、気持ちが楽になったとの記述が続出する。筆者にとって、若さとは根拠のない自信を与えてくれるものであり、大学時代は根拠のない希望に満ちていた。翻って、現在の学生は自信とは程遠い閉塞感に苦しめられ、「失敗したら終わり」という「自己責任論」に押しつぶされそうになっている。若者にとっては、「死」よりも「生」の方が苦しく、重要なテーマなのかもしれない。そのような若者にいかに「生」を語っていくのか。それが「死生学」にとっても、筆者自身にとっても重大なテーマであるように思われる。



中西 恭子 (GCOE若手研究者/明治学院大学非常勤講師 宗教学・宗教史学)

10月21日の死生学研究会において、「ユリアヌスの宗教復興政策における帝国の諸宗教と〈ヘッレーニスムス——仮構のヘラース、伝統的多神教とキリスト教——〉という題名で、紀元後4世紀のローマ皇帝ユリアヌス(331/2-363年、在位361-363年)の宗教観における宗教地誌理解について報告した。参加者は10名ほどであった。

ユリアヌスは、コンスタンティヌス一世以来のローマ帝国における親キリスト教政策を放棄し、伝統的多神教の復興をめざしたことで知られる皇帝である。彼は積極的に著作活動を行った文人でもあり、その宗教観は著作から再構成することが可能である。彼はローマ皇帝でありながら、ロマニタス(ローマ性)よりもヘッレーニスムス(ギリシア性)を称揚し、宗教政策ではギリシア語を共通言語とする帝国東方における聖域の整備を試み、廃れた聖域の廢材(スポリア)の公共建築物・教会・私邸への転用を懸念した。

彼の宗教観には、プラトンと新プラトン主義者イアンブリコス(240年頃—320年頃)の思索が大きな影響を与えている。イアンブリコスは師ポルピュリオスの供犠不要論に反論して『エジプトの秘儀について』を著し、〈一者から流出して可視的な世界に恩恵を与える神々と人間の交流〉にもとづく人間の魂の浄化と、一者への「魂の回帰」に資する営為として供犠と祈祷の必要性を訴えた。

ユリアヌスは求道的に〈神々との交流〉と生活実践の関係を捉えた。人間は生殖と共同体の形成を宿命づけられた生物であるから、それぞれの地域に合った方法で文明と秩序をもたらす神々への恩恵への感謝として、神々について観想を行い、祈りと供物を捧げて交流を保ち、よく生きなければならない。神々の宿る場である聖域と神像は、神々との交流の場所として不可欠である。このような発想に依拠して彼は祭場の整備を正当化した。

ユリアヌスの宗教地誌に顕著なギリシア至上主義は、プラトン『法律』第2巻のギリシア至上主義とも呼応する。彼は帝国領内の宗教の多様性を認識しつつ、ギリシア人の文化と祭祀の圧倒的な優越性を主張した。ギリシア人の構築した地中海世界における普遍一般的な文明は本来ギリシアの神々が与えた恩恵である、という主張がその根拠である。ローマは文明の繁栄と洗練を共有するギリシアの友邦とされる。ユダヤ教は「バルバロイ」の民族宗教とみなされるが、ユリアヌスはアブラ

ハムがメソポタミア出身であることに着目し、イアンブリコスが傾倒した「カルデア神託」を奉じる神動術家の宗教とユダヤ教との同一視を強引に試みて、「カルデア人アブラハム」への回帰をユダヤ教徒に説いた。

363年初のエルサレム神殿の再建計画はこの論理から正当化される。

ユリアヌスの見た「キリスト教」は求道性を欠いた、洗礼と告解を通して安易に浄めと癒しを与える宗教であった。彼は旧約聖書の神の聖性を、人間の知恵の獲得を妬み、ユダヤ人の守護神でありながら現実のユダヤ人に苦難の歴史を与える「嫉む神」であることを理由に否定した。またイエスの聖性を謀反人としての刑死を根拠に否定し、また殉教者の聖性も謀反人の生を模倣したことを理由に否定した。殉教者崇敬はヘレニズム・ローマ世界の伝統的な葬制に照らして〈死者の穢れを帯びた遺骸を崇敬する倒錯〉とみなされる。ユリアヌスはそのような「キリスト教」を墮落した宗教とみなし、ギリシア的修辞学と哲学の精華による知的かつ美的な洗練を加える必要を認めなかった。彼はキリスト教をもユダヤ教の一派として捉え、「カルデア人」アブラハムへの回帰を説いた。

ユリアヌスの「伝統的多神教」理解は宗教哲学としては一貫性をもつが、現実の宗教政策に援用するには理念的にすぎた。そこには娯楽性のある祝祭への関心や、伝統的多神教の宗教都市ローマへの関心はみられない。彼が振興した「父祖伝来の宗教」は、現実のローマ宗教ではない。また、〈愛智〉は超越に貫かれた宇宙の秩序を探究して生きる営為でもあるから、知的かつ美的な検討に耐える洗練を要する。そのような〈愛智〉に関する観点をユリアヌスは同代人であるカッパドキア三教父らと共有していたであろう。しかし、370年代末以降の盛期教父の思索の精華の達成を見る前に夭逝した皇帝の思索には、むしろ素朴な「キリスト教」との接触の痕跡がみられる。ユリアヌスはそのような「キリスト教」の素朴さを帝室と帝国の宗教には相応しくないものとみなした。しかし、彼が所与の宗教として少年時代に参与したアレイオス主義の信仰実践のなかにこの素朴さがあった可能性も十分に想定できるだろう。



Hibba Abugideiri, *Gender and the Making of Modern Medicine in Colonial Egypt*, Farnham: Ashgate, 2010.

勝沼 聡 (本GCOE特任研究員 歴史学)

本書は、19世紀末に始まるイギリスの軍事占領下において、エジプトの医療従事者の間にジェンダーに基づく階層秩序が埋め込まれることによって、女性の医療従事者が男性の医療従事者の補助的地位に追いやられていく過程について論じたものである。

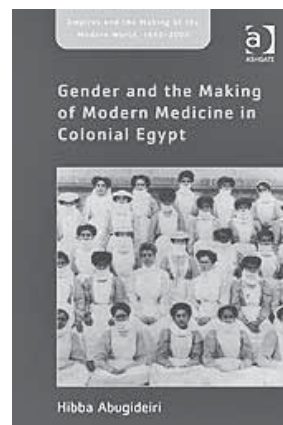
もちろん、フランス人「お雇い外国人」の招聘により「近代化」が開始された19世紀前半のエジプト医学界においても性差に基づく分業は存在していたが、当時の女性の地位は、決して従属的なものではなかった。主に助産婦として活動していた彼女たちは、ハキーマ（アラビア語で「医師」を意味するハキームの女性形）と呼ばれて男性医師と同格の地位、待遇を得ていたという。

当時のエジプトでは、総督ムハンマド・アリーによって推進されていた一連の近代化政策実現のために、兵力・労働力の確保が求められていた。しかし、当時のエジプト社会は慢性的な人口不足に悩まされており、乳児死亡率の抑制は国家が取り組むべき喫緊の課題であった。そのため、助産婦として働く女性たちは、医療の分野において極めて重要な地位を占めていたのである。

しかし、イギリスによる軍事占領下において、エジプトの医学教育がイギリス化の傾向を強めていくとともに、従来の助産婦養成学校には、医師の補助者としての看護師養成という新たな役割が期待されるようになり、次第に助産婦養成よりも重視されるようになった。それに伴い、従来は女性が担っていた出産に関わる医療行為は、男性が担うようになった。しかも、新たに設置された看護師養成コースにまで男性の参入が認められていたことにより、医療における女性の地位・役割はますます低下することになった。

加えて、医学教育に用いられる言語がアラビア語から英語となり、高額な教育費にも受益者負担の原則が導入されたことによって、医学教育へのアクセスは著しく制限されることになった。そしてこれ以降、医療実践の多くは、都市上層に属するエジプト人男性という限られた集団によって独占されるようになっていった。

本書は、占領下において進行した医療制度の変遷を丹念に追うにとどまらず、女性を医療の公的領域から排除し、私的領域に閉じ込めようとする、当時のエジプト社会の言説状況にも注意を向けて



いる。そのなかでは、女性の医療従事者のみならず、広く女性一般が男性に従属・奉仕する存在として位置づけられていったことが指摘されている。

このように、「植民地」の都市エリート男性が、宗主国の価値体系を単に受容するにとどまらず、積極的にそれを強化していく過程をも描く本書は、近年、エジプト近代史研究においてもその利用が盛んになってきた植民地近代性論の影響を強く受けているといえるだろう。

しかし、まさにそれゆえに都市エリート男性と彼らが創出する言説空間の影響力を強調しすぎているという、しばしば植民地近代性論に対して向けられる批判は、本書にもあてはまる。実際には他の高等教育と同様、イギリス占領下における医学教育の修了者は極めて少数であり、現実には近代医学の影響は限定的であったことが想定されるのである。にもかかわらず、本書の意識はエジプト近代における「伝統」医学の役割や、その中で女性の地位にはほとんど向けられていない。

以上のような限界は抱えているものの、本書は、未だ類書の少ない近代エジプト医学史・医療史における注目すべき研究であることは間違いない。また、エジプトを含めた中東諸国におけるジェンダー問題の発生要因を、安易にイスラームや「伝統」に帰することへの警鐘としての価値もまた、本書は有していると思われる。



研究機関誌『死生学研究』第14号を発行いたしました。内容の詳細は下記の通りです。

『死生学研究』第14号

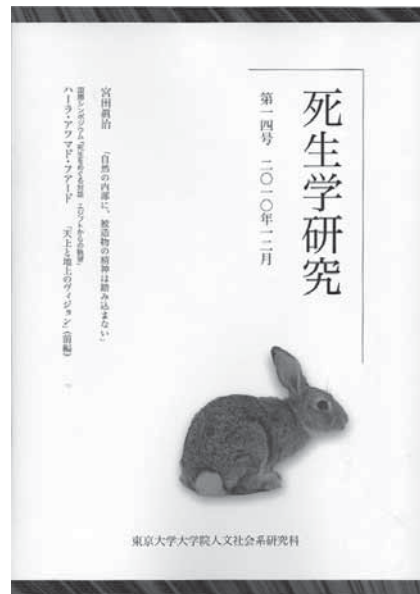
祖先・私・子孫をつなぐピコ（へその緒）の名

現代ハワイ先住民による自己の再帰的プロジェクト
竹村初美

欧文レジュメ

「自然の内部に、被造物の精神は踏み込まない」

A・V・ハラーにおける境界／限界の諸相
宮田眞治



国際シンポジウム「死生をめぐる対話 エジプトからの眺望」

天上と地上のヴィジョン
スーフイズムの初期モデルをめぐる（前編）

ハーラ・アフマド・フアード

欲望から鬱症への内在構造

儒医朱丹溪『格致餘論』の言説を中心として
黄崇修

(2010年12月15日発行)

精神障害を有する受刑者の社会復帰

リスクアセスメントの観点から
松本聡子／野村俊明／奥村雄介

目 次

— CONTENTS —

● 巻頭エッセイ ●

秘儀伝授における死の象徴性 — モーツァルトの『魔笛』をめぐって —

深沢 克己 2

ことばで「死」を語ること

安藤 宏 3

● イベント報告 ●

日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」

池澤 優 4

「The 5th International Tokyo Workshop on Applied Ethics and Philosophy」
台湾・中正大学の鄭凱元氏をお招きして

一ノ瀬正樹 5

シンポジウム「傷つきを語ることの意味と聴くという経験」

山崎 浩司 6

第5回BESETO 哲学会議（北京大学）

松浦 和也 7

シンポジウム「ロールズ『正義論』と現代—自由・平等・友愛の社会へ—」

福間 聡 8

グローバルCOE冬季セミナー《医療・介護従事者のための死生学》

山崎 浩司 9

臨床倫理セミナー in かなざわ

竹内 聖一 10

臨床倫理セミナー in さっぽろ

会田 薫子 11

● 若手研究者から ●

エッセイ 死生学と「生」の困難

石川公彌子 12

報告 第28回死生学研究会

中西 恭子 13

書評 Hibba Abugideiri, *Gender and the Making of Modern Medicine in Colonial Egypt.*

勝沼 聡 14

● 書籍案内 ●

『死生学研究』

15



死生学 DALs ニュースレター No.28

平成23年3月23日発行

東京大学大学院 人文社会系研究科

グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」

代表者 一ノ瀬 正樹

〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

Tel&Fax 03-5841-3736

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>